

14 97歳の前進々々

敬老の日に任運荘では、毎年、高齢者の「人生を語る」発表会をしています

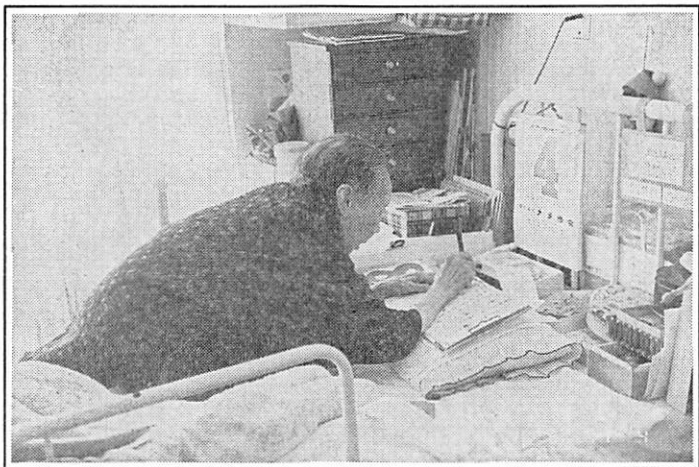
す。羽田野モモエさんも演壇に立ちました。

「はや半年が過ぎました。寝たきりだった私が今は廊下を伝い歩けます。耳は遠く、齒はなく、言葉は回りかねるが、寮母さんにお願いと、知らぬ間にちゃんとすませ、食事は刻んでくれ、心配りうれしいです。

愚かな頭が時折、古里恋しく、学校時代が懐かしく、もう一度やり直したい、と心騒ぐ時もあります。しずやしず しずのおだまきくり返し昔を今になすよしもがな、です。運命に流されてここまで来れば、もう後戻りはできません。前進々々、浄土への修養に励まねばなりません。今日もこの心が変わりありません。これから前進々々、日々好日と参ります」。

車いすで草稿を手に胸はって高らかに述べる姿は、とても九十七歳とは思えません。静まり返る中を、娘さんのハンカチだけがわずかに動いています。羽田野さんは出場が決まると、毎日歩行と発表の練習をするほど常に周囲を意識し、失敗しないような心の姿勢を崩しません。

驚くべきことに彼女の入所理由は重度痴呆（ちほう）、担架に乗っての入所



97歳の羽田野モモエさんは、毎日のように句や詩を書きとめています。「これは私が任運荘で暮らしたあかしです」と。

でした。たぶん病床での異常なまでの欲求不満と、いら立つさまが、はた目には痴呆化と映ったのでしょう。それほど自我意識が強く、誇り高い人だということです。だから、二十日たらずでおむつも外れ、車いすで移動も自由自在です。

他人同士のホーム生活で心はさまざまに屈折し、感情は激しく起伏し、自らを苦しめます。ある日、夕食を自室でしたい、との希望で、寮母が

おせんを運ぶが、うっかり黙って置きました。とたん、こらえていた自己抑制が崩れ、失礼な、と憤然、夕食を拒みます。会話の不自由な彼女は、話や訴えはすべて文にして私たちに差し出します。

「あきらめと大きな勇気をもって任運莊に入りました。九十歳を超して精いっぱい生きています。もう頑張れない。泣いても泣いても涙があふれる。すぐハラがたつ。もうダメです」。

寮母たちは時間をかけて謝り続ける。やっと納得します。今度は反省の文です。「愚かなことを言いました。あの寮母さんの姿が見えませんが、私のことを気にして休んだんではないでしょうか。最高齢になり、壊れやすい心を抱きつつ、なお誇りに生きんと苦闘する姿は、深い輝きを放っています」。

「ああしたら悪いのでは、こうしたら迷惑をかけるのでは」と気苦労する彼女は、時に同室の者への言葉がきつくなる。「フン。何もできないと言うが、ナースコールは大変鳴らし、珍しいお人じゃ。甘えてばかりおらんで、自分ですればいい」。

自主独往、気丈な生活はそのまま活潑な表現活動となり、折々の歌や断章は日記帳に書きとめられ、はや二百首を超えています。朝夕の思索は自己人生の追求であり、そのまま自己実現への道程といえましょう。

数多い彼女の断章より――

「人生は今日の今より外ぞなし」

「天命の人生、ありのままかな我が一生」

「生涯で最大の出来事は、この世に生まれてきたこと」

わが終わりの時もはつきり見すえていて「やがてもう書けぬ。もう見えぬ日が来る。それまでは頑張る」と言います。――いま、九十七歳。その近作を。

「黙ねんと 床に座りて 空仰ぎ のびのびと手足のばして このベッド ねんねんころりホームに抱かれ ひとことで はいと返事の気持ちよさ 書きつくし 思いつくして言うことなし お迎えある日待つばかり 幻の影を追いつつ 今日も行くな 明日も行くな」